

PAPER

夏の高校野球100年の歴史

100 Years of High School Baseball History

黒田 次郎¹⁾

Jiro Kuroda

古城 隆利²⁾

Takatoshi Kojo

松崎 拓也³⁾

Takuya Matsuzaki

Abstract:

This summer marks the 100th Koshien Tournament, the annual national high school baseball championship tournament in Japan. When it started in 1915 (Taisho 4 in Japanese Imperial years), 73 qualifying teams from Japanese secondary schools participated.

Nowadays, 3,800 of Japan's 4,700 high schools belong to the Japan High School Baseball Federation (a rate of 80%). Of the 1.6 million high school male students in Japan, over 10% (160,000 boys) play on baseball teams.

The number of spectators to the Koshien Tournament has exceeded 800,000 people for the past 10 years. Broadcast nationwide on television, this is a wonder summer festival which fosters a sense of pride for their local teams for many Japanese.

This article looks back on the 100-year history of the summer baseball championship event in Japan.

キーワード: 全国高校野球選手権全国大会、日本高等学校野球連盟

Key Words: National high school baseball championship tournament, Japan high school baseball federation

1915（大正4）年、予選出場わずか73校から始まった全国高校野球選手権大会（当時は中等学校野球大会）は今夏、第100回記念大会を迎える¹⁾。

日本には高等学校が約4700校ある。近年は少子化によって参加校の数が減少しているが、それでも80%にあたる3800校あまりが日本高等学校野球連盟（以下：日本高野連）に加盟している。そして、男子生徒約160万人のうち1割以上の約16万人が硬式野球部に所属している²⁾。

昨夏の甲子園大会の入場者数は10年連続で80万人を超えるなど³⁾、多くの日本人にとって夏の素晴らしい風物詩であると同時に郷土愛を育む素晴らしいスポーツの大会である。

今年の大会は100回目という節目の大会であり、白球がつかない夏の高校野球の100年の歴史を振り返りたい。

1. 草創期

高校野球の全国大会が始まったのは、1915（大正4）年の夏（当時は中等学校野球）である⁴⁾。今や夏の風物詩となった大会は、京都大学の学生であった小西作太郎と高山義三が中等野球大会の開催を提案し、それを大阪朝日新聞社（以下、大阪朝日）に持ち込み、その結果、全国大会が

開催されることになった⁵⁾。大阪朝日は、全国大会開催を決めるに当たり、野球の普及活動だけでなく企業の経営戦略として野球を位置づけた⁵⁾。明治後期には学校に野球部が創設され、全国各地で中等野球大会が開催されるようになった（表1）。

主な大会の主催者は新聞の販売拡大を目指す新聞社と自社製品の認知度を高めることを目的としたスポーツ関連企業であった。また、阪神に代表される鉄道会社は沿線に住宅地や娯楽施設などを建設し、イベントを誘致することによって周辺住民を野球場に運ぶ作用による鉄道利用者増加を図った。このように、新聞社と鉄道会社によるコラボレーションにより高校野球の人気に拍車をかけることが可能となった。

第1回大会は大阪府豊中市にある豊中グラウンドで開催された。参加10校、5日間で9試合が行われ、優勝は京都二中であった。野球とスポーツ人気を二分するサッカーは3年後の1918（大正7）年1月に大阪府豊中グラウンドで全国中等学校蹴球選手権大会が開催。参加8校、優勝は御影師範であった。第1回大会は大阪朝日の紙面を有効利用した効果があり大勢の観客が押し寄せた。翌年の第2回大会は、第1回大会の成功が全国に知れ渡り、前

1) 近畿大学産業理工学部経営ビジネス学科 准教授 jkuroda@fuk.kindai.ac.jp

2) 日本体育大学スポーツマネジメント学部 助教

3) 北九州工業高等専門学校生産デザイン学科 准教授

高校野球年表 (表 1)

1884年 (明治17年)	森岡中学に赴任した増嶋文次郎が野球を伝える
1885年 (明治18年)	東京府立尋常中学校にAS会が創立され、野球が行われた
1886年 (明治19年)	三重一中で米国人宣教師ストラーが野球を伝える
1887年 (明治20年)	松本一中で野球が始まる
1888年 (明治21年)	大分中学校の英語教師ウォータスが大分県に野球を伝える
1889年 (明治22年)	正岡子規が伊予尋常中学校の河東碧梧桐に野球を伝える
	高知一中に赴任した内村達三が高知県に野球を伝える
1890年 (明治23年)	正岡子規が野球 (のぼー) という号を使い始める
1891年 (明治24年)	茨城県立中学で野球部が創部
1892年 (明治25年)	広島中学、松山中学で野球部が創部
	慶応義塾で体育会が創設される
1893年 (明治26年)	山形中学、愛知一中、福山中学で野球部が創部
1894年 (明治27年)	中馬庚がベースボールを野球と名づける
1895年 (明治28年)	中学修猷館が福岡聯隊の鎮魂祭の余興として野球の試合を行う
1896年 (明治29年)	横浜で旧制一高と横浜在住の米国人チームが対戦し、一高が勝利
1899年 (明治32年)	広島商業で創部
1900年 (明治33年)	京都二中で創部
1901年 (明治34年)	旧制三高主権による近県連合野球大会が開催される
	早稲田大学で野球が始まる
1902年 (明治35年)	東海五県連合野球大会が始まる
	広島県連合野球大会が開催
1903年 (明治36年)	旧制五高主権の全九州中等学校野球大会が始まる
	旧制七高主権の県下中等学校連合野球大会が開催される
1905年 (明治38年)	早稲田実業学校で創部
1907年 (明治40年)	旧制六高主権の近県中等学校野球大会が始まる
1908年 (明治41年)	全九州中等学校野球大会決勝の熊本県勢同士の対戦でトラブルが起こり、大会が中止。熊本県では野球大会への出場が禁止となる。
1909年 (明治42年)	札幌一中と北海道師範の応援団同士で紛争が起こり、北海道庁が対抗戦禁止令を出す
1910年 (明治43年)	春の東京都下中学優勝試合が開催
1911年 (明治44年)	東京朝日新聞による野球害毒キャンペーンが始まる
	秋の都下中学野球争覇戦が開催
1913年 (大正 2 年)	山陰大会の松江中学と米子中学の試合で暴力事件が起こる
1914年 (大正 3 年)	三上吾朗が米国の独立チームに入団、日本人初のプロ野球選手となる

森岡浩「高校野球100年史」より作成

年より参加校数が40校以上増え、全国大会に進出したのは12校であった⁶⁾。第2回大会も豊中グラウンドで開催されたが、観客の輸送手段の問題や観客数増に対応できなくなり、第3回大会からは開催地が鳴尾球場に変更された。第3回大会では敗者復活の恩恵を受け、1回戦で敗れた愛知一中 (現・旭丘) が優勝した。しかし、初戦で一度負けた学校が優勝という不合理があり、敗者復活制度は以後、廃止されることになった⁶⁾。

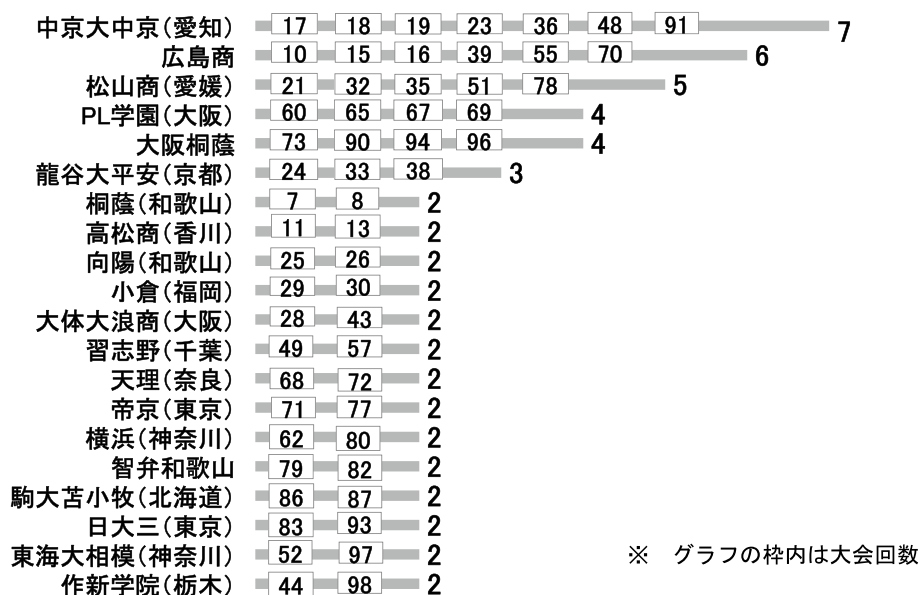
第4回大会は米騒動のため大会は中止された。戦争以外で中止となったのは、この時だけである⁴⁾。その後、第9回大会までは鳴尾球場で大会は開催された。第7回の大会からは朝鮮代表 (釜山商)、満州代表 (大連商)、第

9回には台湾代表も加わった⁶⁾。

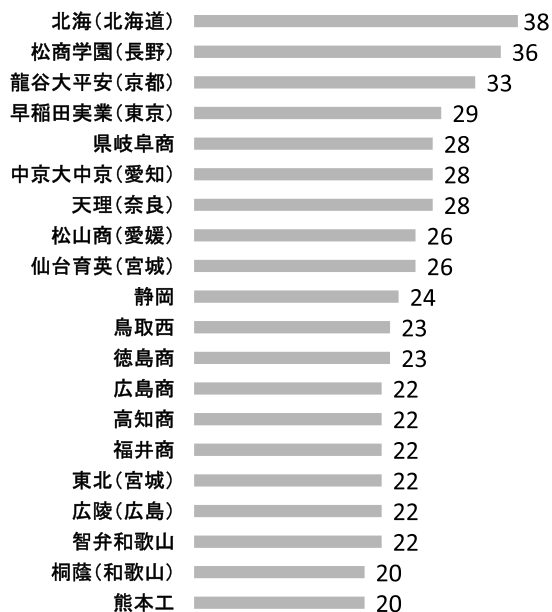
2. 戦前期

第10回大会を迎え、参加校数も増え、中等野球熱も高まり観客の増加が見込まれたことから新たな球場が建設された。新球場は干支で甲子の年にちなんで「甲子園」と名づけられた^{4) 6)}。甲子園球場に移って最初に優勝したのは、広島商業である。第15、16回大会を連覇するなど現在まで夏の大会に22回出場しており、6回の優勝を誇っている。翌年の第17回大会から中京商業 (現・中京大中京=愛知) が大会史上唯一となる3連覇を果たした。学校別優勝回数においても中京大中京は7回と全国一である (表

学校別優勝回数（表2）



夏の全国大会出場回数（表3）



2、表3）。

1926（大正15）年に大正天皇が崩御し、年号が昭和になった第13回大会は大阪放送局（現・NHK）がラジオでの実況中継を開始し⁶⁾、地方の中等野球ファンは試合の様子をリアルタイムで知ることになり、学生野球は社会的な注目を集めるようになった。一方、小学校から大学までの学生野球に統一的なルールが存在しなかったため、応援の過熱化、学生野球の商業化、選手と学業や健康問題、選手のマネキン化学問題などが浮き彫りになった⁷⁾。こうした状況を受けて、1932（昭和7）年の4月に文部省から野球統制令が出され、全国中等学校優勝野球大会と選抜大会は文

部省の許可が必要とされ、主催権、入場料、参加資格等が規制された⁷⁾。

1933（昭和8）年第19回大会、中京商業と明石中学の延長25回伝説の一戦、1939（昭和14）年第20回大会、全試合完封で優勝した海草中学（現・向陽高校）など、幾多のドラマを生んできた中等学校野球大会は1934（昭和9）年に20回大会を迎え、出場校数は22、地方大会参加校数は675と戦前のピークに達した⁶⁾。その後、戦争長期化の影響を受け、1940（昭和15）年が戦前最後の大会となった。

3. 戦後期

第二次世界大戦で中断した中等学校野球大会は、戦後すぐの1946（昭和21）年に第28回大会を西宮球場で開催した⁸⁾。1947（昭和22）年には、地方大会参加校数は1125に増え大会は再び甲子園球場で開催されるようになり、それまでの全国中等学校優勝野球大会が戦後の学制改革に伴って、1948（昭和23）年に全国高等学校選手権大会と改称されることになった⁹⁾。また、「栄冠は君に輝く」が公募により大会歌となった^{4, 6)}。

1948（昭和23）年第30回大会から1957（昭和32）年の第39回大会までは23校によって覇権が争われた。1953（昭和28）年35回大会からはNHKでテレビ放送が始まって、高校野球の人气がさらに高まっていった。草創期の学生野球の伝播の中心となったのは、旧制高校や一、二中といったナンバースクールであった。エリート校の活躍した大正時代から、昭和に入ると新学制のもとで商業高校や工業高校といった実業系高校の活躍が目立つようになった⁴⁾。昭和20年代の甲子園出場高校の8割以上が公立高校（商業、

工業高校を含む)であったが、昭和30年代には高校進学率が高まる一方、ベビーブーム世代の高校進学も重なり新設高校が創設されたこともあり、私立高校が躍進することになった。昭和30年代後半には甲子園出場校の4割近くが私立高校になり、ナンバースクールの流れを汲む各校は進学化の道を選択し甲子園に出場する機会が減少してきた⁴⁾。

4. 一県一校時代

1958(昭和33)年第40回大会は記念大会として開催され、各都道府県1代表に米軍統治下の沖縄代表を加えた47校が参加した^{4, 6, 10)}。

第40回大会は試合数が増えたため、3回戦までは西宮球場も併用された。また、第40回大会から延長戦は18回で引き分け再試合となった^{4, 6, 10, 11)}。

1962(昭和37)年第44回大会で作新学院(栃木)が甲子園史上初の春夏連覇の偉業を達成した。作新学院(栃木)以降は6校【中京商業(愛知)、箕島(和歌山)、PL学園(大阪)、横浜(神奈川)、興南(沖縄)、大阪桐蔭(大阪)】誕生するが、春の優勝投手が1試合も出場せずに夏の大会を制した例はない⁸⁾。

1963(昭和38)年第45回大会は第40回大会に次ぐ2度目の記念大会であった。地方大会参加校数ははじめて2000を超えた。

1965(昭和39)年第47回大会は三池工業(福岡)が初出場初優勝した。高校野球の歴史で工業高校の優勝は1度しかない。加えて、三池工業はその後、一度も甲子園出場を果たしていない^{12, 13)}。

1966(昭和41)年第48回大会では、中京商(愛知)が第44回大会の作新学院(栃木)以来、史上2校目の春夏連覇を成し遂げた。エースの加藤は、春夏両大会の10試合すべてを一人で投げぬいた初の投手となった^{6, 14)}。近年、投球過多や投手の連投が問題視される中、当時はチームのための「熱投」、「根性論」が人々の感動を呼び、美談として残っていることは時代の背景であろう。

1968(昭和43)年第50回記念大会は、第40回大会、第45回大会と同じく、代表校が各都道府県(北海道は南北2校)から48校が出場した。各都道府県から1代表が出場することによって、現在住んでいる土地の代表校や郷土の代表校を応援することによって、野球というスポーツを通して、県民が繋がりを持つようになったといえよう。また、国民の注目と共に高校野球はメディアに大きく扱われるようになった。大会期間中はNHKが全試合を放送する。新聞、雑誌等も紙面を大きく割く²⁾。このように学校の知名度を向上させることができる野球は、私学の学校にとっては経営戦略のツールとなってきた。

第50回大会から初戦の組み合わせが東西対決になるように試みられた⁶⁾。

1969(昭和44年)第51回大会は、史上初の決勝延長引き分け再試合となった。翌日の再試合では、松山商業(愛媛)が4対2で三沢高校(青森)を破って優勝した。

5. 1970年代

1970年代に入り、高校野球は発展期に入っていく。

1970(昭和45)年第52回大会、東海大相模高校(神奈川)で優勝した原貢監督は第47回大会で三池工業(福岡)を初出場初優勝に導いており、史上初めて異なる高校で優勝した監督となった⁸⁾。続く第53回では桐蔭学園(神奈川)が制し、「神奈川を制する者は全国を制す」という言葉が生まれた⁸⁾。

1972(昭和47)年第54回大会から第57回大会までは4年連続で公立高校が全国制覇を成し遂げた。この偉業は戦前昭和期以来のことである。

1974(昭和49)年第56回大会から金属バットが初めて導入された^{4, 6)}。トレーニング方法や食生活の改善などによって選手の体格も向上し、飛距離は確実に伸び、高校野球は変わったといわれた。夏の甲子園で金属バットが採用された74年以降、本塁打の1試合平均本数は73年までの0.2本から3倍の0.6本にペースアップした。特に2008から2017年の10年間は、488試合で403本が飛び出し、平均0.8本と増加傾向である¹⁵⁾。(表4)

金属バット採用前後の本塁打数(表4)

金属バット採用前後の本塁打数		本塁打(1試合平均)
木製バット時代(73年まで)	1261試合	256(約0.2本)
金属バット採用後(74年以降)	2085試合	1341(約0.6本)

<https://www.nikkansports.com/baseball/column/mirai/news/1493758.html> から作成

1975(昭和50)年第57回大会では習志野(千葉)が優勝し、2年連続千葉県代表チームが夏の大会を制し、翌年第58回大会では桜美林高校(東京)が初出場初優勝を果たし、3年連続の関東勢の全国制覇は初の快挙であった⁸⁾。

1978(昭和53)年第60回大会から1県1校(北海道は南北、東京は東西から各1校)による49代表校が出場するようになった。参加校も3000校を超えた。ベンチ入り選手の枠も14名以内から15名以内となった⁶⁾。

1970年代最後の夏の大会を制した箕島(和歌山)は史上3校目の春夏連覇で、その後も公立高校で達成したチームはない。

6. 1980年代

1980年代は高校野球の全盛期であった。1県1校になっ

てから高校野球はテレビ、ラジオ、紙媒体等のマスメディアに露出する機会が増え、マスメディアによるアイドル球児が誕生した。そのアイドル球児の代表的選手が1980（昭和55）年第62回大会に出場した早稲田実業（東京）の1年生エースとして活躍した荒木大輔である。その後、PL学園（大阪）で活躍した桑田真澄、清原和博のKKコンビ、近年では、ハンカチ王子と呼ばれてすさまじい人気を博した早稲田実業（東京）齊藤祐樹などが挙げられよう。夏の甲子園大会の中継はNHK、朝日放送ともテレビ、ラジオで放映、放送され、他のアマチュアスポーツと比較しても取材態勢、報道の量が突出しているのが高校野球である⁹⁾。

日本学生野球憲章によれば、高校野球は「経済的な対価を求めず、心と身体を鍛える場」（前文）であって、さらに「学生野球、野球部または部員を政治的あるいは商業的に利用しない」ことが基本原理（第2条）となっている^{2・10)}。本来、教育の一環として位置づけられる高校野球ではあるが、メディアの過剰な報道によって、甲子園大会への出場校には数千万円の寄付が集まる。また、私学にとっては、甲子園出場による宣伝効果等、多大な恩恵をもたらす、高校野球連盟にも莫大な収益が流れ込んでくる¹⁷⁾。高校野球は、一高校生のスポーツの枠を超えた国民的行事であるが、本来の目的に逸脱することがないように再検討する必要がある。

1983（昭和58）年第65回大会はKKコンビの活躍もあり、大会入場者数が史上最多の83万7千人を記録した⁶⁾。1987（昭和62）年第69回大会はPL学園（大阪）が史上4校目の春夏連覇を達成した。1988（昭和63）年第70回大会は、四国勢がすべて初戦で敗退し、史上初めて、近畿、四国勢が1校もベスト8に残れない大会となった⁶⁾。

第71回大会を迎えた1989年は昭和時代が終わり、元号が平成に変わった初めての大会であった。決勝戦は、帝京（東京）対仙台育英（宮城）。東北勢の決勝進出は、昭和46年の磐城（福島）以来18年ぶりであったが、悲願の「白河越え」はまた持ち越しとなった。

7. 1990年代

1990（平成2）年第72回大会は地方大会参加校が初めて4000校を突破し、夏の甲子園大会の入場者数が史上最多の92万9千人を記録した。

1991（平成3）年第73回大会は初出場の大阪桐蔭が優勝した。大阪桐蔭はその後も安定した成績を収めて強豪校の地位を確立している。

1992（平成4）年第74回大会は星稜（石川）のスラッガー松井秀喜が明徳義塾（高知）戦の全5打席で敬遠され、高校野球ファンの中で賛否両論の議論が巻き起こっ

た^{4・6)}。

通常、高校野球連盟の会長が1試合の内容に言及することはないが、当時の牧野高校野球連盟会長が「走者のいない時は正面から勝負してほしかった」という発言をしたことがより騒ぎに拍車をかけた⁴⁾。ルールに則った作戦という擁護論と高校生らしく正々堂々と戦うスポーツマンシップという観点からの見解の相違があるが、高校野球のあり方について一石を投じた試合であった。

1995（平成7）年第77回大会で柳川（福岡）の責任教諭（部長）が女性として初めてベンチ入りした⁶⁾。翌年の第78回大会から記録員1人のベンチ入りが認められ、東筑（福岡）のマネージャーが女性として初めてベンチ入りした⁶⁾。

1998（平成10）第80回大会は記念大会となり、埼玉、千葉、神奈川、愛知、大阪、兵庫の6府県から2校ずつ、史上最多の55校が出場した。優勝校は史上5校目の春夏連覇をした横浜（神奈川）であった。決勝戦では松坂大輔投手が59年ぶりとなるノーヒットノーランの快投を演じた⁶⁾。松坂投手を擁する横浜は国体でも優勝し、前年秋季大会から、すべての大会に優勝し年間公式戦無敗という偉業を成し遂げた⁴⁾。

90年代は草創期から高校野球をリードしてきた公立高校に代わって私立高校の躍進が目覚しかった。70年代の夏の優勝校の半数は公立高校であったが、80年代は3校、90年代は2校となった。全国の公立と私立の比率は概ね1対0.3であるから¹⁸⁾私立高校が急速に力をつけてきたことは明白である。同じようなことはプロ野球選手の出身校にも表れている。戦後は全国大会出場校と同じようにプロ野球選手も公立高校出身が多かったが、戦後最初に私立高校出身者の数が上回るのは1970年代である。70年代後半から80年代中盤にかけては公立、私立は拮抗したが、87年に私立高校出身者が上回った後は、私立高校が公立高校を上回っている⁵⁾。

私立高校の躍進の背景として、甲子園に出場すれば校名を宣伝することができ、学校のイメージアップにも繋がる。よって、経営者側は国民が目する甲子園に出場するために、練習環境を整備し、優秀な指導者を招聘し、全国から才能ある選手をスカウトして強化に努める。甲子園出場によるメリットは大きく、学校法人の喫緊の課題である経営の安定に繋がるがゆえ、野球に力を入れる私立が増えたことが要因であろう。

8. 2000年代

夏の第1回大会の予選参加校数はわずかに73校、戦後復活した1946（昭和21）年第28回大会で745校だった参加校数は、1963（昭和38）年第45回大会で2000校、1978（昭和

53) 年第60回大会で3000校を突破した。1990(平成2)年には4000校を超えたが、2002、2003(平成15)年の4163校をピークに減少に転じている⁴⁾。少子化の影響もあり参加校数は2017(平成29)年第99回大会は3839校(連合チームの内訳を数えた校数は3945校)となった。最多4163校が参加した2002(平成14)年第84回大会、第85回大会からは14年連続の減少となった¹⁹⁾。

2004(平成16)年第86回大会では真紅の大優勝旗が白河の関を一気に超え、津軽海峡を渡った。翌第87回大会も駒大苫小牧(北海道)が大会史上57年ぶりの連覇を達成した⁶⁾。2007(平成18)年第88回大会は夏の大会3連覇を目指す駒大苫小牧(北海道)と早稲田実業(東京)の決勝戦であった。第51回大会以来となる史上2度目の「決勝引き分け再試合」となり、第1回大会から出場している早稲田実業(東京)が悲願の初優勝を飾った。

2007(平成19)年第89回大会の優勝は佐賀北であった。公立高校としては松山商業(愛媛)以来11年ぶりであった。その後今まで公立高校の優勝は皆無である。

2008(平成20)年第90回大会は第80回大会と同様に代表55校での開催となった。

2010(平成22)年第91回大会は興南(沖縄)が史上6校目となる春夏連覇を達成。

2012(平成24)年第92回大会の決勝戦は大阪桐蔭対光星学院(青森)であった。選抜大会決勝戦と同一チームによる史上初の夏の決勝戦となった。大阪桐蔭が史上7度目の春夏連覇を達成した。2013(平成25)年第93回大会から選手の体調管理を考え、準決勝前に休養日が設けられるようになった⁶⁾。

2000年代は、90年代に私立高校が高校野球を強化すると同様に、「大学の系列・併設校」の存在感が際立った。2009(平成21)年第91回大会に出場した49校中、旭川大(北北海道)、日大三(西東京)、東農大二(群馬)、山梨学院大学付、長野日大、中京大中京(愛知)、龍谷大平安(京都)、立正大浜南(島根)、九州国際大付(福岡)、長崎日大の10校は校名からも「大学の系列・併設校」が明らかである。それ以外にも、関西学院、作新学院、天理などの大学併設校が数校出場している⁹⁾。2017(平成29)年第99回大会も北海(南北海道)、盛岡大付(岩手)、日大山形、土浦日大(茨城)、二松学舎大付(東東京)、東海大菅生(西東京)、山梨学院大付、中京大中京(愛知)、大垣日大(岐阜)、神戸国際大付(兵庫)、天理(奈良)に初出場の早稲田佐賀を加えた12校が出場した。前述したとおり、私学経営において一定数の学生確保は重要な問題である。夏の甲子園の試合はすべてNHKが中継し、学校紹介もしてくれる。また、新聞、雑誌等でも出場校の名前を大きく取り上

げ、その宣伝効果は絶大である。

松谷によれば、2000年代後半以降は私立高校の出場校が70%を超えるようになり、2017(平成29)年第99回大会では49校中41校(83.7%)にまで私立高校の出場校が増えた²⁰⁾。現在の49代表が定着した1978(昭和53)年第60回大会では公立高校の出場が29校と60%近かったが²²⁾、第99回大会では公立学校の出場が戦後初めて10校を割り、近い将来、公立高校の出場校がゼロになる日も来るかもしれないと警笛を鳴らしている²¹⁾。

2000年代に入り、甲子園の優勝校は日大三(東京)、駒大苫小牧(南北海道)、早稲田実業(西東京)、大阪桐蔭、中京大中京(愛知)、東海大相模(神奈川)、作新学院(栃木)の「大学の系列・併設校」が18回大会中11回優勝している。

私立高校が高校野球を強化することは、野球を通じた人間形成=教育の一環という建前はあるが、公立高校も魅力ある学校づくりを展開し、通学圏内の中学生を引き付けられるような環境を整え切磋琢磨して高校野球を盛り上げてほしい。

9. 高校野球の今後

高校野球は時代と共に変革してきた。

延長25回を1人で投げ抜いて、決勝戦では「腕の感覚がない」⁸⁾といったことが美談として語られ、根性論を良しとする時代があった。また、勝利至上主義から、1人の投手を酷使することもあった。高校野球はスポーツであり、教育の一環として位置づけられており生徒の健康より勝利が優先されてはならない。現代スポーツは生徒のパフォーマンスを最大限に生かすために医学・科学・栄養・トレーナー・コンディショニングなど、各分野の専門家が生徒をサポートするようになった。また、運動部の顧問は、スポーツ医・科学の見地からはトレーニング効果を得るために休養を適切に取ることが必要であるとされている²³⁾。そうした中、日本高等学校野球連盟は、投手の登板過多による故障や長時間にわたる試合による健康面に配慮するため、2018(平成30)年第100回大会(8月5日開幕・地方大会を含む)からタイブレーク制度を導入することにした²⁴⁾。今後は更に投手の連投禁止や球数制限、1試合ごとの登録メンバー変更などについても検討されるであろう。

最後に夏の風物詩として日本中の注目を集める高校野球であるが厳しい現実についても触れておかなければならない。高校野球の参加校数は2002、2003(平成15)年の4163校をピークに減少し⁴⁾、2017(平成29)年第99回大会は3839校(連合チームの内訳を数えた校数は3945校)となった。最多4163校が参加した2002(平成14)年第84回大会、第85回大会からは14年連続の減少となった¹⁹⁾。また、日本

スポーツ協会の傘下で、地域の少年スポーツ団体である「スポーツ少年団」の競技別団員数においても、2009（平成21）年は173,978人、翌年は168,512人、2015（平成27）年には118,044人と2010（平成22）年から約30%も減少している。スポーツ少年団自体の人数も621,599人から506,353人と18.4%減少しているが野球人口の減少率は他のスポーツ人口を上回っている。日本の2大スポーツであるサッカーもこの間、147,881人から127,908人と減少しているが減少率は13.5%で競技別人口において野球はサッカーに首位を奪われた。さらに、中学校の体育系のクラブ活動を統括する日本中学校体育連盟の競技別人口を見ても、軟式野球部の部員数は2009（平成21）年は307,053人（競技人口の16.7%）と全競技で1位であったが、2010（平成22）年には291,015人（競技人口の16.0%）と減少し、2015（平成27）年には202,470人（競技人口の11.4%）と30.3%も減少した。サッカーも2009（平成21）年時と比較して減少しているが2015（平成27）年は238,027人（競技人口の13.4%）で中学校体育連盟の競技別人口でもサッカーが野球を上回った²⁹。ただし、クラブチームやJリーグの傘下にあるサッカーチームの競技人口数や硬式野球のシニア、ボーイズ等の競技人口数が加算されていないため不確かなところもあるが、いずれにせよ野球人口が減少していることは否めない。

約4000校が参加する野球の全国大会は世界的に見ても大規模であり、素晴らしい運営システムで、日本が世界に誇れる部活動である。

青春時代の多くの時間を費やす高校野球（運動部活動）は球児にとって身体面では生涯にわたり健康で自立した生活を送るための身体づくりに大きな役割を果たし、心身面では、一人の人間、社会人として、生涯にわたり豊かな人生を歩んでいくためのこころづくり、すなわち「人としての成長」に重要な役割を果たすなど多くのことを学ぶ場である²⁹。

第100回という記念の大会を迎えるにあたり課題は山積だが、時代に即した改革を迅速に行い更に発展することを期待したい。

参考文献

- 1) 朝日新聞 2018年1月1日
- 2) 中島隆信 「高校野球の経済学」東洋経済新報社
- 3) <http://www.asahi.com/koshien/articles/ASK8R3DFKK8RPTQP002.html> 2018年3月19日参照
- 4) 森岡浩 「高校野球100年史」東京堂出版
- 5) 中村哲也 「学生野球憲章とはなにか」自治からみる日本野球史 青弓社
- 6) 週刊朝日編集部 「高校野球100年 蘇る名勝負永遠のヒーロー」朝日新聞出版
- 7) 加賀秀雄 「わが国における1932年の学生野球の統制

- について」北海道大学教育学部紀要51号 1988
- 8) 池田哲雄 「夏の高校野球100年史『真夏の風物詩』甲子園の栄光の軌跡 ベースボールマガジン社
- 9) 酒井治郎 「甲子園の光と陰 高校野球への提言」郁朋社
- 10) <http://www.jhbf.or.jp/sensyuken/history/#01> 2018年3月21日参照
- 11) 池田哲雄 「にっぽんの高校野球 16 総集編」ベースボールマガジン社
- 12) 宮川亨 「激闘甲子園 不滅の大記録」宝島社
- 13) 池田哲雄 「にっぽんの高校野球 九州編Ⅰ」ベースボールマガジン社
- 14) 池田哲雄 「高校野球年代別強豪ランキング」ベースボールマガジン社
- 15) <https://www.nikkansports.com/baseball/column/mirai/news/1493758.html> 2018年3月26日参照
- 16) <http://www.jhbf.or.jp/rule/chapter/index.html> 2018年3月29日参照
- 17) 木原資裕、櫛木雄介 「メディアの中の甲子園・高校野球 -新聞・テレビの報道量を中心に-」鳴門教育大学研究紀要 第27巻 2012
- 18) 浅見俊雄 「高校サッカーの今と昔」コーチング・クリニック2018年4月号 ベースボールマガジン社
- 19) <http://www.asahi.com/koshien/articles/ASK755RQJK75PTQP00G.html> 2018年3月30日参照
- 20) <http://diamond.jp/articles/-/136999> 2018年3月31日参照
- 21) <https://news.yahoo.co.jp/byline/soichiromatsutani/20170806-00074196/> 2018年3月31日参照
- 22) <https://mainichi.jp/articles/20170908/ddm/005/070/009000c> 2018年3月31日参照
- 23) スポーツ庁 「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」2018年3月
- 24) <http://diamond.jp/articles/-/155926> 2018年3月31日参照
- 25) 広尾晃 「野球崩壊 深刻化する『野球離れ』を食い止める！」イースト・プレス
- 26) 島本好平 「青少年のこころと運動部活動」体育の科学 Vol. No.4 2014